

フォーラム

2019年度人間看護学部FD委員会による 授業見学の取り組みについて



川口 恭子, 河野 益美, 甘佐 京子
滋賀県立大学人間看護学部

要旨 高等教育機関でのFDが義務化され10年以上が経過しているものの、定着には課題がある。本報告では、2019年度滋賀県立大学人間看護学部FD委員会における授業見学について、実施状況とレスポンスペーパーの分析から授業見学に対するニーズと今後の課題を検討した。2019年度の実施状況は前期での見学が多く、在宅看護学に関する科目が多かった。見学者の職位は講師が多かった。レスポンスペーパーのコメントは、計量テキスト分析ソフト (KH Corder3) を用いたテキストマイニング法を用いて分析を行った。その結果、見学者は学生が授業で集中している場面、授業における時間配分、授業の展開、構成、内容、学生へのレスポンス、学生の学習状況、実習との関連といったことに着目していることが明らかとなった。本学部の授業見学は、モデルとなる授業からその展開や授業技術を学ぶこと、教授内容の調整といった機能を持ち、若手教員の教育力の向上に効果的であると考えられる。今後、授業見学が定着した際には、授業を公開する教員に対してもより教育的な効果が得られるような機能を付与する工夫が必要であることが示唆された。

キーワード 授業見学, FD委員会, FD活動, 活動報告, テキストマイニング

I. はじめに

A. FDの位置づけ

Faculty Development (以下、FDとする) は、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」(文部科学省中央教育審議会, 2005) である。1991年文部科学省大学審議会「大学教育の改善」答申のなかで、FDの積極的な推進が謳われて以降、個々の教員だけでなく全学および学部学科の組織的な取り組みとしてFDの必要性が示されてきた。「21世紀の大学像と今後の改革方策について」答申(文部科学省大学審議会, 1998)を受けて、大学設置基準において1999年にFDが努力義務とされ、2008年には義務付けられることとなった。取り組みの具体例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などがあり(文部科学省中央教育審議会, 2005)、各大学で様々な取り組みがされている。

文部科学省が全国の国公私立大学776校を対象に行った調査(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室, 2019)によると、平成28年度において、教員相互の授業参観を実施する大学数は428校(57%)、教員相互の授業評価を実施する大学数は151大学(20%)、ア

クティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会を実施する大学数は320大学(42%)であった。また、専任教員のFDへの参加率は、教員全員が参加した大学数は121大学(16%)、4分の3以上(75%~99%)が参加した大学数は355大学(47%)であった。

市村、鎌田、倉島(2018)は、大学におけるFDの取り組みに関して、FDに対する教員集団全体のコンセンサスの不十分さや個々の教員が主体的に取り組むまでの土壌が組織的に培われるまでに成熟していないことを指摘している。このことから、FDが義務化され10年以上が経過したにもかかわらず、十分に定着しているとは言

Efforts to Class Observation by the FD Committee of the Faculty of Human Nursing in 2019

Kyoko Kawaguchi, Masumi Kono, Kyoko Amasa

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2020年9月30日受付, 2021年1月15日受理

連絡先: 川口 恭子

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町2500

e-mail: kawaguchi.k@nurse.usp.ac.jp

い難い状況であると考えられる。

B. 本学部のFD委員会の設置と取り組み

本学部では2003年度からFD委員会が立ち上がり、FD活動の推進に力をいれてきた。2015年度からは、教育力向上に関するワーキンググループと研究力向上および国際化に関するワーキンググループを立ち上げ、教育活動と研究活動のそれぞれにおいて教員の能力向上に努めている。教育に関するワーキンググループでは、講義や演習における教授方法や実習指導をテーマに取り組んでいる。

II. FD委員会における授業見学の位置づけと目標

A. 本学部FD委員会における授業見学の取り組み

本学部FD委員会における授業見学の取り組みは、教育に関するワーキンググループの取り組みとして2018年度から開始された。発案当初は、若手教員の教育力の向上をはかるため、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業への見学が企画された。FD委員会での検討を重ねるなかで、教員の経験年数や対象とする授業を限らず授業の見学をしてみようということになった。そこで、FD委員会が教員間の調整を担うことにより授業見学の取り組みを推進することとなった。2018年度に実施したところ教員に好評であり、ぜひ委員会としての取り組みを継続してほしいという声が多かったことから、2019年度も引き続き授業見学をFD委員会の活動として取り組むことになった。本報告は、2019年度の授業見学の結果をまとめ、授業見学に対するニーズや今後

の課題について述べる。

B. 2019年度授業見学の活動指針

学部で行われている授業を見学することによって、授業設計や展開方法を学ぶ機会とする。また、看護学の各科目を横断的に理解することも目的の1つとし、学部教員に広く参加を求める。

III. 授業見学の実施概要

A. 実施期間

2019年4月12日～2020年1月30日。

B. 授業見学の方法

FD委員会から学部の全教員に対して、公開可能な授業の提示を依頼した。教員からの回答を受け、FD委員会では公開可能な授業の一覧を作成した。そして、公開可能な授業の一覧を学科会議および学内メールで学部教員に周知し、見学希望者を募った。

授業見学は領域を問わず自由に参加できることとし、申し込み授業数の制限は設けなかった。申込者数を学科会議で報告し、申込者名を科目担当教員に事前に報告した。見学予定に変更がある場合は、見学予定者から科目担当教員およびFD委員担当者に連絡することとした。

C. レスポンスペーパーの提出

授業見学後、見学者は見学した授業へのコメントやFD委員会への授業見学に対する意見をレスポンスペーパーに記入し、提出用ボックスに提出することとした。提出されたレスポンスペーパーは、FD委員会担当者が

表1 公開授業科目

時期	授業形態	科目名	授業教 (コマ)	科目担当者の職位(人)			見学者数 (延)(人)	見学者の職位(人)		
				教授	准教授	講師		准教授	講師	助手
前期	講義	家族看護学	1		1		2	1		1
前期	講義	疾病論Ⅰ	1	1			1		1	
前期	演習	基礎看護技術Ⅰ	1	1			2		2	
前期	講義	成人看護学	1	1			1		1	
前期	演習	成人クリティカルケア演習	2			2	2		2	
前期	演習	エンドオブライフケア演習	4	4			4	2	2	
前期	講義	母性看護学	1	1			1		1	
前期	演習	母性看護学演習	1			1	1		1	
前期	演習	精神看護学演習	1			1	3		3	
前期	演習	在宅看護学演習	6		6		9		9	
前期	講義	公衆衛生看護学Ⅱ	2		2		2		2	
前期	講義	ホリスティックケア論	1		1		3	1	2	
後期	演習	基礎看護技術Ⅱ	2	2			2		1	1
後期	演習	成人クロニックケア演習	4	4			4		4	
後期	講義	精神保健論	2	2			3		2	1
後期	講義	在宅看護学	3	3			5		5	
		計	33	19	10	4	45	4	38	3

回収し、その原本を科目担当者に提出し、写しを委員会の控えとして保管した。

IV. 授業見学の実施結果

A. 公開授業科目

公開された授業科目は 16 科目、33 コマであった。授業開催時期について、前期は 12 科目、後期は 4 科目であった。授業形態は、講義 12 コマ、演習 21 コマであった。授業を公開している教員の職位は、教授 19 名 (57.6%)、准教授 10 名 (30.3%)、講師 4 名 (12.1%) であった。見学者数は延べ 45 名であった。授業を見学している教員の職位は、准教授 4 名 (8.9%)、講師 38 名 (84.4%)、助手 3 名 (6.7%) であった (表 1)。

B. レスポンスペーパーの提出状況

見学後のレスポンスペーパーは 37 枚提出された。同授業に参加者が複数いた場合、参加者 1 名ごとにレスポンスペーパーを 1 枚提出することとなっている。2 コマ連続の演習科目や継続した内容の演習科目については、1 枚のレスポンスペーパーで提出する場合もあった。

C. レスポンスペーパーの分析方法

レスポンスペーパーのコメント欄に記載された内容について、計量テキスト分析ソフト (KH Corder3) を用いたテキストマイニング法によって分析した。分析対象データは、レスポンスペーパーのコメント欄に記載された内容をエクセルファイルに手入力したデータとした。KH Corder3 を用いて、データの前処理を行った。

授業見学を行うことによって何について考えたか、ということ明らかにするため、名詞およびサ変名詞の頻出語の上位 10 位を抽出した (表 2)。さらに、頻出語の上位に挙げた語の特徴を明らかにするため、関連語検索を行い、その関係

表 2 名詞およびサ変名詞頻出語 (上位 10 位)

順位	抽出語	出現回数
1	学生	97
2	授業	95
3	看護	34
4	見学	34
5	演習	25
6	講義	25
7	時間	25
8	在宅	24
9	ケア	22
10	参考	22

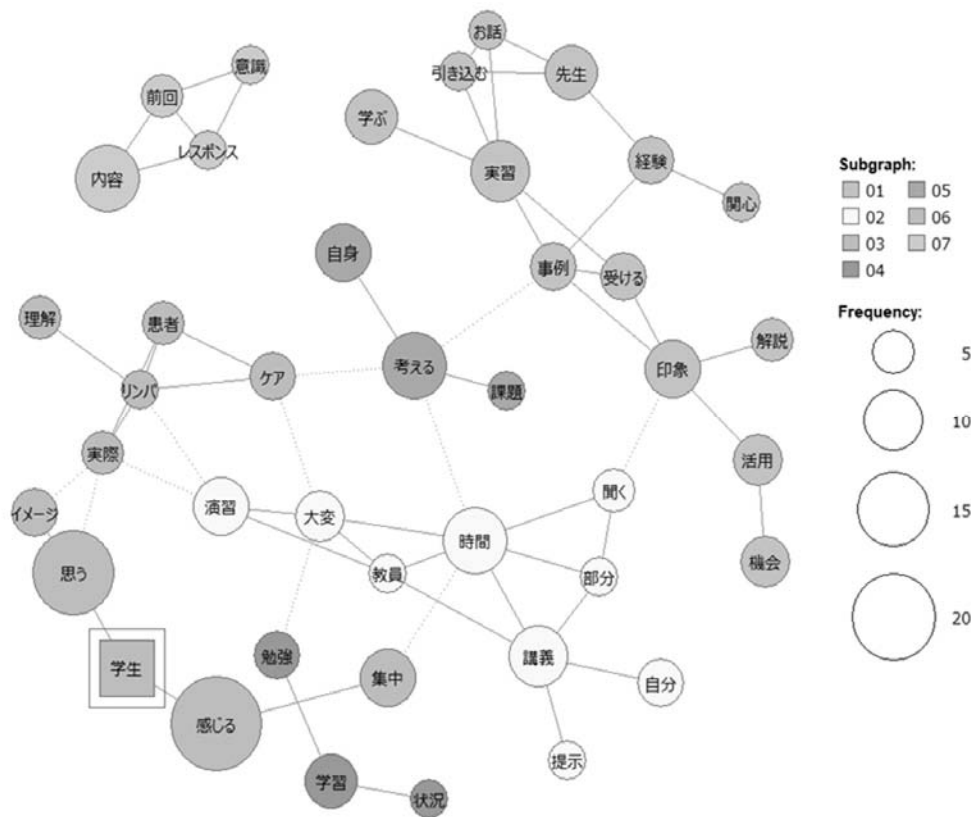


図 1 「学生」の関連語検索による共起ネットワーク図

性を共起ネットワーク図に示した(図 1, 2)。関連語検索は、「注目する『語』と同じ文脈に出る傾向が強い『語』の集合を検索して、注目する『語』の特徴を探る」機能とされている(株式会社 SCREEN アドバンスドシステムソリューションズ, 2020)。

1. 「学生」の関連語検索手順

「抽出語」の「関連語検索」を選択した。直接入力項目に「学生」を入力し、集計単位は「文」として集計を行った。「ソート」のリストから「共起」を選択し、「共起」が降順であることを確認した。関連が弱い語を除去するため、共起 4 以上の語の数を確認し、「フィルタ設定」で「表示する語の数」を上位 44 とした。共起 4.0 以上の語 (N = 44 以上) をフィルタにかけ、共起ネットワークを作成した(図 1)。

2. 「授業」の関連語検索手順

「抽出語」の「関連語検索」を選択した。直接入力項目に「授業」を入力し、集計単位は「文」として、集計を行った。「ソート」のリストから「共起」を選択し、「共起」が降順であることを確認した。関連が弱い語を除去するため、共起 4 以上の語の数を確認し、「フィルタ設定」で「表示する語の数」を上位 35 とした。共起 4.0 以上の語 (N = 35 以上) をフィルタにかけ、共起ネットワークを作成した(図 2)。

D. レスponsesペーパーの分析結果

1. 名詞およびサ変名詞の頻出語(上位 10 位)

名詞およびサ変名詞の頻出語を検索した。その結果、「学生」「授業」の出現回数がとくに多いことが示された(表 2)。

2. 「学生」および「授業」についての関連語検索の結果

「学生」についての共起ネットワーク図(図 1)から、学生の「集中」に関する、「講義」や「演習」の「時間」に関する、「実習」に関する、「勉強」や「学習」の「状況」に関する、「課題」を「考える」ことに関する、「前回」の「内容」や「レスポンス」に関する内容が示された。

「授業」についての共起ネットワーク図(図 2)から、授業「見学」への感謝、「集中」する「時間」や「展開」「構成」について「考える」「機会」となったこと、「内容」や「レスポンス」について、「今後」の「参考」「自分」の「担当」に「活かす」といった内容が示された。

VI. 授業見学に対するニーズと今後の課題

A. 公開授業科目および見学状況について

授業見学の時期は、前期に集中していた。本学部では、

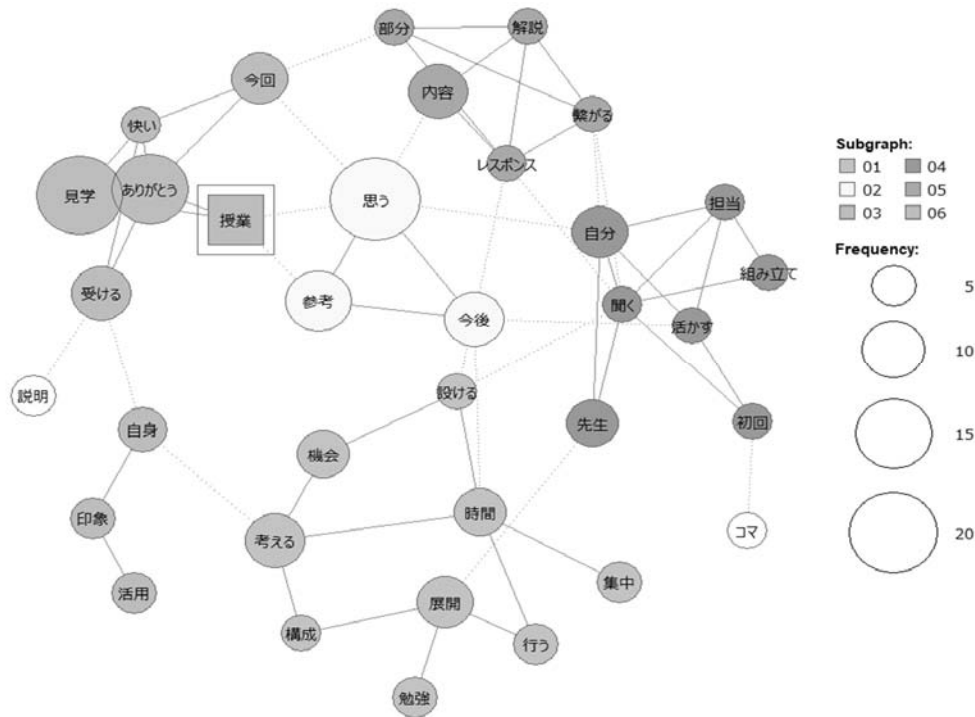


図2 「授業」の関連語検索による共起ネットワーク図

前期に講義・演習科目が多く、後期に臨地実習が集中するカリキュラム構成である。前期のほうが公開される講義・演習科目数が多いこと、見学する教員も前期のほうが見学しやすい環境であることから、前期の授業見学が多くなったと考えられる。

授業形態では演習科目が多く、科目では在宅看護学に関する科目が多かった。これは、地域医療や地域包括ケアシステムの構築といった看護の役割や活動場所の多様化といった社会情勢の変化を踏まえて、看護基礎教育の実習指導等においても、病院から地域へという視点が必要になっているためではないかと考えられる。2017年に「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」において「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が取りまとめられ、看護の役割や活動場所の多様化に対応できる人材育成の必要性が示されている。こういった背景から、在宅看護学に関する科目の授業見学が多かったのではないかと考えられる。

見学者の職位では、准教授、講師、助手のうち、講師が大半を占めていた。講師は教授・准教授に比べて授業を担当する経験が浅く、授業見学のニーズが高いことが考えられる。また、自身が担当する機会の多い演習科目の授業設計や展開方法を学ぶことを目的に演習科目の見学数が多くなったことも考えられる。

B. 授業見学に対するニーズと今後の課題

レスポンスペーパーの分析結果からは、授業を見学した教員は学生が授業で集中している場面、授業における時間配分、授業の展開、構成、内容、学生へのレスポンス、学生の学習状況、実習との関連といったことに着目していることが明らかとなった。また、これらの内容を自身の授業を行ううえで参考にしたいという意向があることが明らかとなった。

田口、藤田、神藤、溝上(2003)は公開授業の類型として、啓発型、モデル伝達型、ファカルティ連携型、反省型、ネットワーク志向型の5つに分類している。モデル伝達型は、「改善の視点を得るという動機付けがすでになされている教官」が参観者となり、「モデルとなる授業を公開することで、『よい授業』『授業技術』を学びとることが目的」としている。ファカルティ連携型は、「同じ学科内の教官同士がお互いの授業を見学しあうことで(授業の)内容を講義間で調整したり、教え方の調整を行ったりすることが可能」としている。

本学部の2019年度の授業見学では、授業を公開している教員の職位は教授および准教授が多く、授業を見学している教員の職位は講師が多かった。本学部の授業見学は任意であり、見学した教員は田口らの「改善の視点を得るという動機付けがすでになされている教官」に該当すると考えられる。さらに、レスポンスペーパーの分析結果から、授業見学への感謝が述べられ、学生が集中

する時間や授業の構成、展開について関心を寄せ、今後自身の授業の参考としたいという意向があったことから、本学部における授業見学は田口ら(2003)の「モデル伝達型」の機能をもつものと考えられる。また、学生の学習状況の把握や実習との関連について着目していることから、「モデル伝達型」の機能に加えて「ファカルティ連携型」の機能も併せもつと考えられる。

2019年度の授業見学の活動指針として目的に挙げた「授業設計や展開方法を学ぶ」ことは、田口らの「モデル伝達型」の機能と一致し、「各科目の横断的理解」は「ファカルティ連携型」の機能と一致していると考えられる。このことから、授業見学の活動指針における目的と授業見学者のニーズは合致していたと考えられる。科目の横断的理解については、2022年度入学生から適用される第5次指定規則改正の中で領域横断型カリキュラムが推奨されており、その前提として現在行われている科目の相互理解がより一層必要となると考えられる。

石田(2010)は、看護系大学の新任教員に対する国内文献の分析を行い、新任教員に対するFD推進のためには、〔手持ち資源〕〔他者評価〕〔学生への関心〕〔学生の成熟度や学習理解の程度〕〔教員間の交流〕〔あるべき教員像〕〔仕組み〕といった〔困難に影響を与える要因〕に働きかけることの必要性を報告している。授業を見学した教員が授業見学のなかで着目していた点は、石田の示す〔手持ち資源〕〔学生への関心〕〔学生の成熟度や学習理解の程度〕〔教員間の交流〕〔あるべき教員像〕といった〔困難に影響を与える要因〕に類似しており、授業見学を推進することで若手の教員が抱え易い困難を軽減させることに寄与すると考えられる。

その一方で、本学部の授業見学は「モデル伝達型」や「ファカルティ連携型」の機能が強く、若手の教員が〔他者評価〕を受ける機会とはなっていない。田口ら(2003)は、「モデル伝達型」の問題点として、授業を公開する人は改善のための新たな視点が得られないこと、「ファカルティ連携型」の問題点として、学科の規模によっては一緒にできる人がいないことを挙げている。本学部におけるFD活動としての授業見学は始まったばかりであり、一定期間「モデル伝達型」および「ファカルティ連携型」の機能を中心として授業見学を行うことは、若手教員の資質向上に効果的であると推察できる。また、授業見学を継続するなかで授業を公開することが日常的なこととなり、専門領域を超えて授業を見学したり、意見交換を行うことができる風土を醸成できるのではないかと考える。授業見学が定着した際には、授業を公開する教員にとってもFD活動としてより意義があるものになるよう、その機能を変化させていく必要がある。

Ⅶ. おわりに

本報告では、2019年度滋賀県立大学人間看護学部FD委員会における授業見学の取り組みについて、授業見学の実施状況および見学後のレスポンスペーパーの分析をとおして、授業見学に対するニーズと今後の課題について検討した。2019年度の実施状況については、前期での見学が多いこと、在宅看護学に関する科目の見学が多いこと、見学者の職位は講師が多いことが示された。レスポンスペーパーの分析からは学生が授業で集中している場面、授業における時間配分、授業の展開、構成、内容、学生へのレスポンス、学生の学習状況、実習との関連といったことに見学者が着目していることが示された。本学部の授業見学はモデルとなる授業からその展開や授業技術を学ぶこと、教授内容の調整といった機能を持ち、若手教員の教育力の向上に効果的であると考えられる。また、第5次指定規則改正の中で領域横断型カリキュラムが推奨されており、その前提として現在行われている科目の相互理解が必要である。今後、授業見学が日常的なものとなった際には、授業を公開する教員に対してもより教育的な効果が得られるような機能を付与する工夫が求められる。

謝 辞

本学FD活動にご協力いただきました本学部の皆様に感謝申し上げます。

文 献

- ・ 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
- ・ 市村路子, 鎌田由美子, 倉島幸子 (2018). 看護学部における教員の教育能力向上を目的としたFD活動報告. 上武大学看護学部紀要, 10, 1-11.
- ・ 石田佳代子 (2010). 看護大学の新人教員に対するファカルティ・ディベロップメント (FD) 推進のための文献調査に基づく課題. 看護科学研究, 9, 10-18.
- ・ 株式会社 SCREEN アドバンストシステムソリューションズ (2020). KH Coder を用いた計量テキスト分析実践セミナー初級編. pp.43.
- ・ 鍛冶谷静, 北村瑞穂, 金津春江, 榊原和子 (2016). 教員相互による公開授業参観の成果と課題—授業担当者および参観者による報告書のテキストマイニング分析を通して—. 四条畷学園短期大学紀要, 49, 47-56.
- ・ 片貝智恵, 高橋ゆかり, 渡部洋子, 長島真由美, 吉岡一実 (2010). 看護学部のFD活動におけるピアレビューの現状と課題. 上武大学看護学紀要, 6 (1), 44-52.
- ・ 文部科学省大学審議会 (1991). 「大学教育の改善について」 答申. <http://jsme.umin.ac.jp/book/pdf/wpmej-1994-211.pdf>
- ・ 文部科学省大学審議会 (1998). 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」 答申. https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm
- ・ 文部科学省中央教育審議会 (2005). 「我が国の高等教育の将来像」 答申. https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04091601.htm
- ・ 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2019). 平成28年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要). https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2019/05/28/1417336_001.pdf
- ・ 田口真奈, 藤田志穂, 神藤貴照, 溝上慎一 (2003). FDとしての公開授業の類型化—13大学の事例をもとに—. 日本教育工学雑誌, 27, 25-28.